

進行性大腸がんと診断されて

がんの検査を受ける過程

今年の春せきがひどくて寝られない夜が続き、少し良くなったと思ったらまたひどくなるの繰り返し、仕方なく近くの病院へ行きそこで血液検査をうける。先生から「せきよりも貧血の方が悪いから」と便潜血検査を受けたが、その数値が悪かったので「大きな病院でしっかり検査をするように。」と 紹介されました。

実は二年前の会社の健康診断で貧血が指摘されていて、今年の診断でも同じように指摘されたのですが、軽い立ちくらみの症状はありましたが、生活するには何の支障もないのでほっておいたのです。

それから 病院で胃カメラ・エコー・血液・腸の内視鏡検査を受けました。

その検査をふまえて、8月1日(金)に H 医師から「肛門から30センチ上の所に2センチ弱の大きさの進行性S状結腸がんがあります。」と診断される。「転移しているかどうかを調べるためにCTをとります。それと手術するようになると思いますので外科を紹介します。」と言われました。

それに対して僕は「ちょっと待ってください。僕は手術をしたくないと思っています。」と答えると「進行がんと言ってもまだ早いので手術をすれば助かる可能性が高いです。ほっといたらがんが進行して転移しますよ。」と言われました。

「今回たまたま2週間以上も咳が治らなかったのが病院に来ましたが、そうでなかったら病院には来ていませんでした。それなのでもう少し様子を見たいのです。」と答えると「がんはほっといても治ることはありません。まだ55歳で若いのだからほっといたら死にますよ。骨にでも転移すると本当に苦しみますよ。」と言われたのです。

僕自身は前もってがんと診断された時の対応を考えていたのですが、やっぱり直接医師から「がんで手術が必要」と言われてしまうとさすがに動揺してしまい、自分の意見をしっかり話せず、H 医師も僕の話の聞こえようとする姿勢はまったくありませんでした。

それで話が平行線になりかけてたので一緒に来てくれていた家内が「取りあえずCTで転移があるかどうか調べてもらって、それからどうするかを判断したら…?」と言ってくれ、その日の話はそれで終わりました。

二つの違った意見

あらかじめ覚悟をしていたことですが、医者から直接にがんとはっきり言われたのはさすがに動揺し気持ちが揺れました。そして医者から話された内容は世間一般では当たり前になっている標準治療だと思えます。しかしその世間一般のがんに対する考え方とは違う考え方があるのです。

もうだいぶ前のことになりますが、テレビで偶然見た番組に近藤誠医師が出演されていました。その

番組は近藤医師が出版された本「患者よ、がんと闘うな」をもとに、それに対して反対の意見の医師との対談でした。その番組には胃がんで亡くなられたニュースキャスターの逸見政孝さんの奥さんも同席されていたのを覚えています。

僕には何の前知識や先入観がなくただ番組を見ていたのですが、近藤医師の話されている考え方は論理的で道理があるように感じられました。それをきっかけに図書館で近藤医師の本を何冊か借りてきて読み、もし自分ががんになった時は役立てたいと思っていました。最近では一年ほど前に近藤医師の新しい本「医者に殺されない47の心得」を買って読んでいましたが、まさか本当に自分のことになるとは思っていませんでした。

近藤医師のがんに対する考え方の基本は「がんには出来るとすぐに転移する本物のがんと大きくなって転移しないがん・がんもどきがあり、どちらのがんも症状が出ない限りほっておくのが一番の治療方法(放置療法)」「がん検診にはがんによる死亡率を下げる力はなく役立たないので無意味。」「抗がん剤は血液のがんなど特殊ながんには効果があるが、胃がん肺がんなどの固形がんには効果がなく、その猛毒性で患者を苦しめるだけ。」「だと思えます。

H 医師から話された内容 A と近藤医師の考え B とを対比してみると

A 「進行がんと言ってもまだ早いので手術をすれば助かる可能性が高い。」

B 「本当のがんは見つかった時にはすでにごん転移があり手術しても無駄、そうでないがんもどきの場合は症状が出てから治療しても遅くなく、がんによる症状が出てないのなら手術やその後の治療による合併症や後遺症のリスクを考えると手術をしない方が良い。」

A 「ほっといたらがんが進行して転移する。」

B 「がんには転移するものとしないものがあり、はじめに転移のないがんはそれ以降転移しない。」

A 「がんはほっといても治ることはありません。」

B 「本物のがんでない場合はほっておいてもそれ以上に大きくなることも多く、症状が出てないのならそのままにしても問題ない。またがんもどきならば症状が出てから治療しても問題なく、手術に伴うリスクを考えると急ぐ必要はない。」

A 「まだ 55 歳で若いのだからほっといたら死ぬ。」

B 「たとえ本物のがんの場合でもすぐに死ぬことはない。そして本当のがんなら治療で治ることはないので急いで手術をする必要はなく、むしろ無理な手術や治療は患者を苦しめる上に、かえって命を縮める結果になる。」

A 「骨にでも転移すると本当に苦しむ。」

B 「がんによる痛みはモルヒネや放射線を使ってコントロール出来る。」

II 医師への不満

たまたま担当になってくれた先生ですが、初めて受診した時に問診はほとんどなく、腹部触診もなく「胃カメラ・エコー・腸の内視鏡検査をしましょう。ついでに血液も。」と言われただけ。

検査の結果を聞きに行った時も僕の容態や状況を尋ねることはなく、またがんについての詳しい説明もない、がん患者の不安な気持ちに対する配慮が感じられなかった。その上患者自身の意見に対しても理解しようとする姿勢はなく、反対に脅かすような内容で話をする。

僕が自分の意見に反対の意見を言ったせいで気を悪くしたのか、最後の方は僕に話さずに家内に向かって話をしていました。

診断の日に薬を処方されが、II 医師から薬に対しての説明は何もない。処方されたのは「フェロミナ錠」インターネットで調べると貧血の薬らしいが副作用もある薬なのでちゃんと説明してほしい。（何も説明のない薬なので、今更貧血の薬もないと思い薬を受け取らずに帰ってくる。）

II 医師の態度に対しての不満を家内に話したら「お医者さんは大勢の患者を診ているから、ひとりひとりに気持ちを入れていたら大変とちがうか。あれで普通のお医者さんだと思う。」と言われる。

毎日忙しく働いていて、がん患者に対しては決められた標準治療を事務的に処理していれば誰からも文句を言われないのである。これは II 医師が特別悪いのではなく、それが一般的な普通の医師なのかも知れない。しかし、患者の命に関わる仕事なのだからそれで良いのだろうか。

たとえば僕が手術を受けないと言った時に「どうしてそう思われているのですか？」と尋ねてくれなかったのかと思う。もしかしたら宗教上の都合で手術を受けられないのかもわからないし、また身近な人が手術を受けて苦しんでいる姿をみていたからかも知れないのに、患者のそんな気持ちを聞き、その上で医師としての知識や経験をもとにして、その患者にとって最善の治療方法を一緒に考える。それが本当の医者のかたとはいえないかと思う。

II 医師は最初から最後まで目の前の患者の僕をみようとはせず、カルテや検査結果だけをみて、それからあらかじめ決められている標準治療を事務的に進めようとしただけで、それに反対する意見を患者が言うと「死」と「苦しむ」という言葉で脅しつける。それでもその標準治療が本当ががん治療にとって最善の治療方法だとしたら、それはそれである意味間違っていないのかも知れないのだけど、その標準治療というのには本当に正しいか疑問があります。

II 医師への不満 II

8月11日(月) CT 検査の結果を聞きに

～家内と二人で行く。

診察を受ける前は II 医師とまた話をするのかと思うと気分が重かった。それでも前回から一週間たち、その間に調べたことや考えたこともいろいろあり、II 医師に確かめるせつかくの機会かも知れないと思い直して診察にのぞむ。

診察室に入ると H 医師から「CT 検査の結果ではがん転移はなかったので良かったです。手術をすることになるので外科を紹介します。」と言われる。「その前に前回詳しく僕のがんのことを聞けなかったので、いくつか教えてもらいたいことがあるのです。」と質問する。

「初めのがんの詳しい位置はどこでどんな状態ですが？」という問いには「肛門から 25 センチのところ、ちょうど大腸が曲がっているところ直腸の一番上にありますね。S 状結腸がん、いや直腸がんで大きさは 2 センチから 3 センチですね。」と言われる。今回は肛門から 30 センチ・S 状結腸がんで大きさは 2 センチ弱と言っていたのに、内容が変わっているのにあきれる。

次に僕が「がんのステージは？ その浸潤の様子は？」と尋ねると「ステージはⅡ期、浸潤はおそらく筋層に届いているので、内視鏡手術は無理ですね。」とのこと。そんな話は僕が尋ねる前に、それ以前に 1 回目の時に尋ねるまでもなく医師の方から説明する内容だと思う。

それからこの病院で行われている手術のこと「開腹手術と腹腔鏡手術」について簡単な説明をしてもらう、手術のリスクやリンパ節や抗がん剤治療については「詳しくは外科で聞いてもらったら良いのだけど、患部を切りとる手術の時の様子でリンパ節をとることや、抗がん剤治療も考えられる。それは実際に手術をしてみて、がんの状態を診てからでないとはっきりしたことはわからない。」重ねて「もし他の臓器に転移が見つかったら、そのがんは治らないのですか？」と尋ねると「まあ、そうゆうことやろうね。」と返事される。

ここから話は本番になり本当に聞きたかったことを質問する。

まず今の検査方法で見つかるがんの大きさは 1 センチだということを確認してから「それでは CT では 5 ミリとかそれ以下の大きさのがんはあっても見つけられないはずで、僕のがんの転移はなかったのではなく、見つけられなかっただけでしょ。もしかしたらすでに転移しているかも知れないんですね。そしたら転移があるかどうか急がないで様子を見るのも良いのではないですか？」と言うと「いや、だから転移が見つからない今、急いで治療した方が良いんですよ。」とのこと。話が上手くかみ合わない。

それから話をかえて「がんが大きくなる進行スピードはどのくらいですか？」と尋ねると「それはそれぞれのがんによって違うから一概には言えないよ。」「それはそうですが、だいたいどのくらいかはわかっているのではないですか？」と重ねて聞いても答えを濁してはっきり言ってくれない。

(近藤医師の本には初めに出来たがん細胞から 1 センチの大きさのがんになるまでには、10 年から 20 年かかると書いていましたが、それが間違っていたら重大な見落としになるので、インターネットで調べたところ、特別少数な医師の意見ではなく、がん保険の案内している普通のホームページに同じことが書いてありました。)

それでそのことを話しすると「そんなことはない、ポリープか何かの間違えと違うか、本当のがんはもっとずっと早く成長する。」と取り付く島もない。これは僕の憶測ですが、もしかしたら H 医師は今までそんな質問を受けたことがなく、調べたこともなくて知らなかったのではないかと思う。そうだとしたらがん治療に関わる医師として問題にならないくらい勉強不足ではないのか。

それから僕が「がんが転移しているかを確かめたいし、それには時間をかけないとわからないので、今は手術をせずに半年・一年と様子を見たいです。」と言うと「そんなことをしていたら手遅れになってしまうよ。」と同じことの繰り返し「それなら僕のがんが確実に転移するのはいつですか？その確率

は何パーセントですか？そしてその根拠は？」と尋ねると「一年以内、100パーセント」と返事はあったが、その根拠は「がんはそんなもの」的な感じで、少なくとも僕にはわからない説明でした。

しつこく僕が転移を確認したいと言うと「がんの転移があるどうかは本当のところ手術をしてみないとわからない。開腹してみれば初めて腹膜に転移してるがんが見つかることも多い。」とちらりと本音が出る。それなら「転移がないうちに手術をしましょう。」と言う話と矛盾するのではないかと思う。

それから僕が「どうなったとしてもそれは自己責任として手術をしない。」とをさらに言うと「とりあえず外科に行って詳しいことを聞いてもらって、それから手術をするかどうか決めてもらい。もしそれでも手術はしないと決めたらもう一度内科を受診してください。でもその時は自己責任の承諾書を書いてもらいますよ。」と言われる。

「今すぐにでも承諾書を書きますよ。」と返事をすると「いや、それなら僕はあなたのホローは出来ません。」とのこと「なぜですか？本人が自己責任でそうしたいと言っているのに。」と重ねて言うと「そんな無茶なことをする人のホローを僕は出来ません。」と言い切られる。これは一見患者のことを思って言っているようにも思われるけれど、要するに自分の治療方針に従わない患者は見捨てるという意味ではないのか。

僕自身はここまで話して、もうこの医師とは話しても無駄だと思い「それでは他の病院にかかるときは紹介状を書いてもらえますか？」と言うと「それは紹介状ぐらい病院名を教えてもらえれば書きますが、そんな病院が見つかりますかね。」と皮肉交じりに言われる。

家内の気持ち

そこまで言われるとかえってせいせいするので、あくまでもH医師からは外科で説明を受けるように言われましたが、それを断って帰ろうと思ったところ「あなたの気持ちだけでなく、ご家族の気持ちはどうなんですか？」とH医師に逆に言われ、家内をみると泣いている姿にびっくりしました。僕ががんだとわかってからは少なくとも僕の前では家内は泣いたことはないのです。これには正直驚きました。

家内は自分の思いを上手く言葉に出来ないので、その時の気持ちを僕なりに想像すると「どうしてこの人はお医者さんのいうことを聞かないんやろうか？今だったら助かると言ってくれているのに！病気のことは素人にはよくわからへんのやからお医者さんに任せたら良いのに、変な理屈ばかり並べて自分の意見を通そうとしている。そんなことをしていたら死んでしまうかも知れないのに…？」ではないかと思います。

僕のがんという病気については一番家内に心配かけているし、これからも一番迷惑をかけることになります。だから僕が選ぶようとしていることを、そしてその理由を家内にはわかってもらおうと僕なりに努力をしたつもりだったのですが…。

家内は正直で心の優しい人ですが頑固なところがあり、なかなか自分の意見をかえないところがあります。今まで意見が食い違った時に、僕が理屈で追い詰めるような話し方をして来たことが悪かったみ

たいで、理論的に話しても伝わりにくく、僕が一生懸命に話せば話すほど耳をふさいでしまうことになってしまいます。

今回のことも出来るだけ押しつけにならないように話してきたつもりでしたし、表面上は家内も納得してくれている様子でした。それでも診察の前には言葉だけではなく、自分の思いを手紙に書いて渡していたので、少しは僕の考えを理解してくれていると思っていたのですが残念です。でもそのことで家内を責めることは出来ません。

家内の気持ちは僕のことを本気で思っていることなのでよくわかります。僕自身、自分で判断せずに病気のプロである医者に判断をゆだねた方が楽のように思います。そしてその考え方は僕の両親もそうでしたが、多くの人の考え方で「お医者さんは神様、なんでも言うとおりにしていれば間違いない。」と同じです。しかしやっぱりその考え方を僕は間違っていると思います。

そうやって自分で何も判断せずに人に判断をゆだねてしまうことは、病気のことだけでなくいろんな大切なことを他人任せにしてしまうことに繋がります。少なくとも一人の社会人の責任として、社会にある問題に対しては最低限自分のこととして何が正しいのか判断することをしていかないと、この社会は決して良い方向を向かないのではないのでしょうか。

今までそのことの大切さは僕なりにわかっているつもりでしたが、何も権力や組織的なバックアップもない、ごく普通の男がそんなことを考えても仕方がないのでは…？と半ばあきらめかけていました。

それでもこと自分の命に関わる問題なのでそんなことは言っていられません。ここが踏ん張りどころだと思っています。今回は身近な人にも僕の問題を伝え、出来れば共有して一緒に話し合えればと思っています。それから家内にはこれろから時間をかけて僕の思いを伝えたいと思っています。この文章を書くきっかけになったのはそういう思いからです。

がん標準治療の大きな落とし穴

さて、話はもとに戻りますが、一応外来の説明を受けることにしてその日は帰りました。(外来への受診は予約をしましたがキャンセルしました。それは手術をするつもりはないのに無駄だと思ったからです。) 帰り際にH医師が「がんのガイドラインがありますから。よく読んでみて下さい。」と言うので「それはもう買って読んでいます。」と答えて帰りました。

最後まで患者に対して不誠実で、僕のことを見下したようなH医師でしたが、そのH医師がいうガイドラインは「がんの早期発見・早期治療」をもとにした「がんの標準治療」のことだと思います。

今、ほとんどの病院で普通に行われているがんの標準治療とは「がんの早期発見・早期治療」することが「がん治療で一番有効」という考えのもとに行われているのですが、それには大きな矛盾を含んでいるのです。この何十年の間、多くの病院や医者ががん検診をし、そして早期治療を行ってきているのに「全がん死亡率」が下がっていないということです。もしその方法が本当に正しいのならがんで死ぬ人が少なくなっているはずなのです。

それとがんが進行するスピードは一般的に思われているのよりずっと遅いということです。

初めに出来た一つのがん細胞が1センチの大きさに成長するのは10年から20年かかります。そして今の医療技術で見えるがんの大きさは1センチの大きさ、だからもし僕のがんから運悪く転移がんが見つかったとしても、それは10年以上前に転移されていたことになります。また転移が見つからなかったとしても、転移がないのではなく小さくてわからないだけかも知れないのです。だから転移があるかどうかは本当にはすぐにはわからないので、1年・2年と様子を診るしかないわけです。

以上のことからでも「がんは少しでも早く治療を開始しなくては手遅れになる。」という考え方は正しとは言えないと思います。

様子をみることの大切さ

本当のがんは確かに人の命を奪う恐ろしい病気ではあるのですが、だからと言ってがんにかかるとうすぐに死んでしまうことは決してないのです。

がんで死ぬにはまず主要臓器にがんが転移することです。転移が恐ろしいのは転移するのが一か所だけだったらそれだけを治療すれば良いのですが、1個の転移があればその後には無数の転移があると考えるのが普通なので、その全部を治療するのは不可能になるわけです。

でも転移があったからと言ってもすぐに死ぬわけではありません。がんが転移してからその臓器で大きく成長する。(だいたい10センチの大きさ)そして転移した先の主要臓器の働きを阻害し、臓器不全を起こしたことで死に至るわけです。がんが大きくなってからでも患者に体力があればなかなか死ぬことはなく、患者の体力ががんに負けた時に最後が訪れるのです。

世の中には生命力の強い人がいて、医者から末期がんと診断され匙を投げられてからでも5年・10年と生き続けている人も結構いるみたいです。正常な細胞がしっかりしている間は、がん細胞といえどもその力を十分発揮するのが難しいからかも知れません。

僕の進行がんの場合を考えると、進行がんは早期がんよりも転移している可能性が高ので、もしがん転移があるとしたら早まって手術をしたらかえって命を縮める結果になります。それは転移したがんは治らないのに、無理な手術や抗がん剤治療・放射線治療は確実に患者の体力を奪うことになります。するとがんが活発になり、治療したつもりがかえってがんを助けることになります。がんになり急に亡くなった多くの人の死因が無理な手術や治療によるものらしいです。

一方がん転移がなかったとしたら、転移しないがんでは死ぬことはないので焦る必要はありません。内視鏡手術など簡単に取れるのなら体には負担が少ないですが、開腹手術や腹腔鏡手術は体には大きな負担になります。術死の可能性もあり、手術に成功しても後遺症や合併症で苦しむことが多いです。

もう一つ、これは近藤医師に対する批判にあるのですが、がんには本物のがんとがんもどきの二つだけではなく、その中間のがんがあるという意見があります。僕のがんでいうと「今は転移がないけれどこれから転移が始まるがんがあり、今手術をすれば助かるのに様子をみるのは手遅れになる。」という意見です。でもかりにそれが正しいとしても僕にはあまり関係ありません。

もし僕がもっと若かったら心配になる意見なのですが、55歳の僕の場合は仮に半年後のがんが転移し

たとしても、それからがんが成長して僕の命を縮めるようになるのは20年以上も先になるのです。来年のことですらどうなるかもわからないのに、そんな先のことなんて心配しても仕方ないですね。

進行性の大腸がんの僕にとって今一番大切なことは、そのがんの転移があるかどうかを見極めることだと思います。そしてがんによる自覚症状が出来た時にその症状に対して治療を始めたいと思っています。何も治療をせずただ様子を診ることはある意味勇気が必要ですが、体に一番負担が少なく、今までと同じような生活を続けることが出来、そして一番長生きでいる可能性があると思います。

がんの本質を知る

人ががんになる一番の原因は老化、すなわち「老い」にあります。歳をとるとだんだん体が老いていき、55歳になれば白髪頭になり老眼にもなっています。若い時とは違い疲れがたまりやすく踏ん張りがききません。これから何も病気をしなくても老いていくことは自然なことです。

残念なことです。人間にはいつか必ず死が訪れます。それは人間だけでなく、全ての生き物でも同じの自然の摂理です。必要以上に死を怖がっても仕方ありません。どんなに楽しい小説や映画でもかならず最終章が来て、終演になります。そのことをいくら嘆いてみてもどうしようもないことです。

何より大切なことは、しっかり落ち着いて、何が一番大切なのかを自分で考えてみることではないかと思います。老いることを、がんになったことを恐れるあまり「少しでも早くしないと死んでしまう。」と焦ってしまうと冷静な判断が出来なくなります。それはまるでどこかの「オレオレ詐欺」に引っかかっている被害者の心境とよく似ているのではないのでしょうか。

判断を人にゆだねたくない・ゆだねない

今まで書いてきたことはあくまでも僕の意見・考えです。それが100パーセント正しいとは思っていません。どこか大切なことを見落としていたり、大きな勘違いがあるかも知れませんが、それでも本筋の所ではそう間違っていないと僕は思っています。

とは言うものの僕に全然不安がないわけでは決してありません。たとえば「今すぐに僕のがんが悪化してしまい、苦しみながら死んでいくのではないか…？」とふと考えている自分があります。

はじめ僕はしっかりいろんなことを調べた上で、何が正しか判断したいと思っていました。でも僕がいくら調べたとしてもH医師よりも医療のことやがんについて詳しくなれるはずはありません。まして世間一般的に常識化しているがんの標準治療が間違っていることなんて証明出来るわけがありません。

繰り返しになりますが、だから患者は何も考えず、専門家の医師を信頼してまかしておけば良いという考え方も当然あると思います。世間一般の多くの人がそんな考え方なのかも知れませんが、はたしてそれは本当に正しいことなのでしょうか。僕はそうは思わないのです。

学者や専門家の様にいっぱい知識があったとしても必ず正しく判断出来るのではなく、反対にたとえ少ない知識でも自分が体験したことや考えてきたこと・感じていたことを基にして、自分の中で判断し

ていけるのではないかと思います。もちろんそれは間違っているかも知りません。しかし自分の命に関わる大きな病気に対しては人任せするのではなく、せめて自分で納得した方法を選びたいと強く思います。

今の僕の体の様子はというと体重は少し減っています。(63キロぐらい) この2年近く貧血による軽い立ちくらみはありますが、生活には何も支障はありません。半年ぐらい前まで便が細くなっていましたが今は普通の便が毎日あり、ご飯も美味しく食欲はあります。少し疲れやすくなっていますがそれは年齢のせいだと思います。

健康診断で貧血を指摘されてから1年半以上、病院に行くようになってからも2か月になりますが、がんによる症状は何もなく、体調の変化もありません。

日本の医療機関の闇

これは余談になるかも知れませんが、僕ががん治療を医師任せにしたくないもう一つの理由があります。それは日本の医療機関が抱えている負の問題です。

「医は仁術」と言われていますが現実には「医は算術」になっていますね。医療に関することで利益を上げること自体は決して不正なことではないと思います。ただそれが患者のためになる方向での利益であれば良いのですが、利益のための医療になっていることが問題です。そのことは近藤医師の「医者に殺されない47の心得」で指摘されています。

がんの標準治療でいうと、それが作られた過程は多くの研究者や機関が真面目に取り組んで作られたものだと思います。しかしそれが社会の中でシステム化され、医療学会の保障という権威を持ち、医療産業として経済的に確立されると、もう絶対的なものになってしまっているようです。

本当ならその標準治療を続けていく中で出てきた問題点を基に、さらに改善していくことが大切だと思うのですが、現実の医療現場ではそうならないみたいです。

一旦出来上がったシステムはそれ自体を守ろうとして、目の前の患者に対してがん治療を行う中で、がんの標準治療の問題点に気づき、それを指摘した少数の良心的な医師は医療社会の中でつまはじきにされている。なので本当は問題点に気づいている医師や研究者がいたとしても見て見ぬふりをしている人も多いのではないのでしょうか。反対にH医師のようにその治療方針が正しかどうかは権威ある医療学会にゆだね、決められた標準治療を事務的におこなう医者や病院が大勢ではないかと思います。

そういう問題は医療問題だけでなく、教育問題・エネルギー原子力問題・環境問題・農業問題・今、問題になっている集団的自衛権の問題や領土問題にも共通していると思います。

たとえば尖閣・竹島などの領土問題にしても、お互いの国が自分の意見を主張するだけではますます対立するばかりで、そのために軍事的な緊張がさらに高まる。そんなことをして誰が得をするんでしょう。本当は急いで解決する必要もなく、また出来ないのだから、お互いに相手国の意見聞き、時間をかけて理解しあうことでしか解決できない問題です。だいたい国境なんて人間が勝手に決めてだけで、宇宙から見た地球には地球儀のように国境線なんてどこにもないのです。

最後に

なんか話が脱線してしまいましたが、今まで書いてきたのはあくまで僕の意見です。

僕の断片的な知識や薄っぺらな考えを基にした意見なので、間違っているかも知れません。もしかしたらこの先「あの時、なんでそんな選択をしてしまったんやろうか…？」と女々しい僕は後悔することになりかも知れません。しかし、その後悔は自分で決めたことによる後悔なので諦めがつきます。反対に自分がおかしいと気づいているのに判断をゆだねてしまった結果の後悔なら、後悔してもしきれないと思うのです。

今回、自分ががんになったとことで、がんに対する問題意識が立上がってきました。

それ以前なら、たとえば知り合いの60代の男性から前立腺がんがあることを話された時、仲の良い友達から弟さんが肺がんになったと教えてもらった時、僕自身がんに対する意見はありましたが、とてもその意見を言うことが出来ませんでした。

せいぜい「がんに対しては世間一般の考えと違う考え方があり、近藤誠という人が本を出しているから読んでみる価値はあると思う。」ぐらいしか言えませんでした。

いま日本では三人に一人はがんで死に、50歳以上の男性の二人に一人は前立腺がんを持っているそうです。だからがんは自分が、また身近な人がいつなるかも知れない病気です。そんな身近な病気にも関わらず、なんとなく触れてはいけないように思われていて、がんについては漠然とした「死に至る恐ろしい病気」というイメージがあるだけです。本当のがんの姿を理解されている人や理解しようとしている人は少ないのではないかと思います。

でも今回は僕自身のがんになり、自分のこととして話すことが出来ます。

そのことを自分だけのことにしないで、みんなのこととして提案していきたいと思っています。かりに僕の選択が正しかったとしても、間違っていたとしても、そのことの体験を共有することが出来れば、きっと役立つのではないのでしょうか。

この長くて稚拙な文章を読んでもくれた人たちと、これからがんという病気を通して一緒に話し合い、考えて行きたいと思っています。ぜひご意見ご感想をお聞かせ下さい。

これからよろしくお願ひします。

20014.8.14(木)